

第10章 子育て支援に取り組む地域活動推進シンポジウム in 熊本

1. シンポジウムの概要

テーマ：地域における子育て支援をどう進めるか

日時：平成19年1月22日(月)13時15分～16時00分

場所：御船町カルチャーセンター

参加人数：90人

開催目的：このシンポジウムでは、地域の人達による子育て支援活動を広め、活動を活発にするために、地域における子育て支援の実践事例から学ぶとともに、「地域における子育て支援をどう進めるか」をテーマに話し合う。

タイムスケジュール：

- 13：15 開会
- 13：15～13：30 開会行事 事務局次長挨拶
来賓挨拶
- 13：30～14：10 事例発表
地域ぐるみの子育てをすすめる ひだまりの会（福岡県福岡市）
報告者：浦 真弓 代表
八代市子育てサークルネットワーク レインボー（熊本県八代市）
報告者：澤井 美香 代表
- 14：10～14：20 休憩
- 14：20～16：00 全体協議
テーマ「地域における子育て支援をどう進めるか」
メンバー
浦 真弓（地域ぐるみの子育てをすすめる ひだまりの会 代表）
柴田 恒美（NPO法人子育て談話室 理事長）
コメンテーター
村上 千幸（植木町山東保育園 園長）
コーディネーター
澤井 美香（八代市子育てサークルネットワーク レインボー 代表）
- 15：45～15：55 まとめ
- 15：55～16：00 閉会行事 事務局次長挨拶

2. 事例発表

(1) 地域ぐるみの子育てをすすめる ひだまりの会

事例発表として、「地域ぐるみの子育てをすすめる ひだまりの会(以下、「ひだまりの会」と表記)」代表の浦真弓さんから、当事者の目線から見た子育て環境の問題点ならびに福岡市で「ひだまりの会」が運営している子育てサロンについての報告が行われた。

まず、2歳と5歳のお子さんをもつ浦さんから、子育ての問題点として、



「自然や人とのふれあいの少なさ」が挙げられた。例えば、身近にある公園には、衛生上の理由から砂場がなく、公園内の噴水も、景観用としてあるだけで、そこで子どもが遊ぶことは禁止されているという。誰もが利用できる公園であるにもかかわらず、子ども達が土や水といった自然に触れて遊ぶ場ではなくなっているのである。さらに、そうした公園を利用する人は少ないため、子育て中の親子の出会いの場にもなりえていない。実際、浦さん自身も、人を求めて公園を渡り歩く「公園ジプシー」をした経験をもっている。子育て中の母親達は、人との出会いを得づらく、一人ひとりが孤立した状況に置かれているのである。

こうした母親達を孤独な育児から救い出すひとつのきっかけとなるのが、子育てサロンの存在である。実際、浦さんも、子育てサロンに通い始めたことで、人とのつながりができたという。とくに、初めて訪れた時には、スタッフから「またおいで」という声をかけてもらい、あまりのうれしさに、トイレでお子さんを抱きしめて泣いたという。親子がのびのびと過ごせ、また温かい人間関係を築けるサロンは、母親達にとってかけがえのない場となっているのである。

そして、福岡市城南区でこういった子育てサロンを運営しているのが、「ひだまりの会」である。「ひだまりの会」では、2004年から「つどいの広場事業」を受託し、土曜日を除く毎日、10～16時まで、「城南区子育てプラザ」を開催している。この「子育てプラザ」には、毎日20～30組くらいの親子が訪れており、親と子ども、親同士、親と他の家の子どもというように、子育て中の親子のふれあいの場となっている。他にも、地域の方がおんぶ紐を作ってくれたり、学生がクリスマス会を企画したりと、ボランティアとして多様な人が関わっている。子育てサロンは、親子の居場所であると共に、さまざまな人が関わる子育ての場となっているのである。

（2）八代市子育てサークルネットワーク レインボー

つづいて、「八代市子育てサークルネットワーク レインボー（以下、「レインボー」と表記）」の代表である澤井美香さんから、「レインボー」の活動概要についての報告が行われた。

「レインボー」は、八代市内で活動している子育てに関わるサークルをつなぐネットワークである。2006年現在、14のサークルが参加しており、それぞれの活動は、親子遊びや読み聞かせのボランティア、おもちゃ図書館や託児支援など、多岐にわたっている。そして、こうしたさまざまなサークルをつなぐなかで、「人と人、親と親、子と子、子と親の出会いの場の提供」を目指しているのである。「レインボー」という名も、子育て中の母親と地域、行政の「虹の架け橋」となることを願って付けられたものである。

このネットワークが生まれたのは、2002年のことである。当時、八代市内に子育てサークルはできつつあったが、どこにどのようなサークルがあるのかわからないという状況があった。そこで、「八代市の状況を把握したい」という思いのもと、保健センターがサークル代表者に呼



びかけ、情報交換会が開催された。この情報交換会が契機となって、子育てサークル同士をつなぐ「レインボー」が発足したのである。

「レインボー」では、月に1回、各サークルの代表者が集まり、八代市の「コミュニティスペースこどもの城」において、例会を開いている。この例会は、各サークルの子育て支援に関わる情報交換の場ならびにサークルリーダー同士の支え合いの場となっている。なお、運営の

ための資金は、1 サークルにつき 1000 円の年会費に加え、行政などから助成金を得ている。他にも、「レインボー」では「家庭教育推進協議会」と連携し、子育てサポーターのリーダー養成講座の開催や、カナダの親教育プログラムを用いた講座の企画・開催をしている。さらに、子育ては乳幼児のみならず、学童期や思春期等、すべての年齢に通じているとの考えから、「食育」「思春期」「メディア」等をテーマに講演会も開催している。それぞれのサークルの特色を活かしながら、多様な支援を展開しているのである。

3 . 全体協議の主な内容

全体協議は、メンバーに「ひだまりの会」の浦さんと「NPO法人子育て談話室（以下、「子育て談話室」と表記）」の理事長の柴田恒美さん、さらに、コメンテーターとして「植木町山東保育園（以下、「山東保育園」と表記）」園長の村上千幸先生をお迎えし、「レインボー」代表の澤井さんの司会のもとで進められた。



まず、協議に入る前に、柴田さんから、「子育て談話室」の活動紹介がなされた。この「子育て談話室」は、

2003 年から、御船町において、「つどいの広場事業」を受託し、「つどいの広場 ゆうゆう」を開催している団体である。もともと小中学生に対する支援をしていた団体だったが、小中学生の悩みや問題を扱ううちに、乳幼児期からの親子関係作りが重要であると考えようになり、乳幼児の子育て支援に乗り出すようになった。そのため、「ゆうゆう」でも、広場を訪れる保護者達には、親としての自覚をもてるよう、また、良い親子関係が築けるよう、さりげない働きかけを行っている。また、「子育て談話室」は、行政からの援助を受けない自主事業として、民家を借りた子育てサロンの開催や、「子育てサポートハッピー」と称した託児を、御船町周辺の町で実施している。子育てをしている当事者達の声を聞きながら、子育てしやすい環境づくりを進めているのである。

こうした活動紹介を踏まえ、全体討議では、「地域における子育て支援をどう進めるか」をテーマに、フロアの参加者も交えた話し合いが行われた。議論が進むなかで、子育て中の母親が置かれている状況やそれに対する支援のあり方について、さまざまな立場からの意見が出された。ここでは、その一部を紹介していくことにする。

まず、山東保育園の村上先生から、子育て中の保護者が置かれている状況についての話があった。現在、母親達の多くが育児に対する不安を抱えているが、この原因として、生活のなかで子育てを教わる機会のないことが考えられる。本来、子育ては社会的なものであるため、経験者や周囲の人達から教わらなければできないものである。しかし、年長者との関わりが少なく、子育てに関するモデルが身近にいないため、母親達は子ども達をどうやって育てたらいいのかわからず、どんどん不安を抱えることになってしまうのである。

それでは、こうした母親達の不安を解消するために、どのような場が作られているのであろうか。全体討議では、フロアの参加者を交え、地域の人々と母親達をつなぐような、さまざまな子育て支援の場が紹介された。

例えば、あるサークルは、民家を地域交流サロンとして開き、お年寄りや子育て中の親子、地域の子どもの体験・交流の場を作っている。そして、活動をする際には、民生委員・地域

の老人会など、さまざまな立場の人が関わって、お互いに声かけをしているという。こうしたサロンは、子育て中の母親と地域の人とをつなぐ役割をしているのである。他にも「ひだまりの会」や「山東保育園」、他のサークルなどは、学生ボランティアを受け入れることにより、多様な人との関係を生むきっかけ作りをしているようである。

また、母親達の支援に直接関わるものではないが、子育てを取り巻くさまざまな団体や機関のつながりも生まれている。例えば、ある小学校では、「安全」をキーワードにしながら、老人会や婦人会、幼稚園・保育園など14ほどの団体を交えた安全ネットワークを作り、安全教育を実施している。さらに、子育てに関わるサークルや幼稚園・保育所といった機関、行政などさまざまな子育て支援関係者をつなぎ、顔の見える関係を作ることを目指した「子育て連絡協議会」が作られている町もある。就学前の親子を主にした取り組みであるが、学校に上がってからも連携していけるよう、子ども達の成長に応じた長い目をもって、つながりを作っていこうとしているのである。

こうしたそれぞれの活動は、さまざまな団体や人の協力を得て行われている。今後は、こうした活動がさらに発展するよう、子育てを支える資源となる人々の力を活用するような仕組み作りが必要であるとの認識が共有された。

4. 感想

シンポジウム全体を通じて、子育て中の母親達の抱えている不安やその解決策としての子育て支援のあり方を考えることができたように思う。実際、御船町周辺では、母親達の子育てを支えるようなさまざまな取り組みがなされている。1つひとつの活動は異なっているが、どの活動からも、子育て中の母親達を見守り、助けていきたいという地域の人達の温かい思いが感じられた。こうした思いがあればこそ、母親達の不安や負担が少ない環境を作ることが可能になるものと考えられる。

なお、シンポジウムの参加者からは、「沢山のいろいろな施設でサークルを開いておられるのを知りました。地域とのつながりが広がれば、もっと良い子育ての環境が出来ると思いました」「年齢が違う人達との集える場（サロン）があり、それが子育ての援助になっているということは、少子高齢の今の社会でお互いが育ち合える」といった感想をいただいた。今回のシンポジウムは、地域で生まれる人々のつながりの重要性について、考える機会となったようである。

今回のように、さまざまな団体の人々が集い、フロアの参加者も交えながら、地域における子ども達の育ちについて議論する機会は多くはない。実際、参加者からは、「現場の声、実際に実践されている人々の生の声がきけて良かったです。参加者の顔ぶれにも幅があり貴重な意見が聞けました」といった感想もいただいている。こうしたさまざまな立場の実践者の声を聞き、共に考えられたことは、たいへん貴重な経験となった。

最後になりましたが、このシンポジウムを無事終えることができましたのも、貴重なお話を聞かせてくださったサークル代表や先生方、シンポジウムにご参加いただいた皆さま、ならびに生活学校の方々のおかげであると思います。企画委員の1人として、心より御礼申し上げます。本当にありがとうございました。